

資料室だより 4 (1994/2/4)

当資料室では“Portugaliae musica”というシリーズ（叢書楽譜）を継続購入しています。今年初めに新たに何冊が受け入れました。ヨーロッパのなかでもポルトガル音楽というのはイメージが湧きにくく、私たちには遠い存在に思えるかもしれません。しかし日本人が初めて西洋というものに接したのはポルトガルを通じてではなかったでしょうか。1543年（天文12年）、ポルトガル船が種子島に上陸して鉄砲を伝えています。7年後に、ポルトガル船が平戸に入港、1557年（弘治3年）には平戸で歌ミサが挙げられ、入港のポルトガル船員も参加したとあります。

この時期、スペインと並んでポルトガルは国力も充実し、大航海時代を迎えます。音楽の素養豊かであったアラゴンのレオノールがドン・デゥアルテと結婚したことによりポルトガル宮廷の音楽生活も充実します。さらにアルフォンソ5世、ジョアン2世、3世の時代には、シルヴァ、ハイヴァ、コレイア、ピレシュなどがすぐれたオルガン曲や宗教声楽曲を残しています。17世紀にはスカララッティの来訪やセイシャスの出現はあったものの、全般的には衰退の傾向にあったようです。

このシリーズは、過去から現代にわたるポルトガル音楽の遺産を宗教曲、世俗曲、器楽曲にわたって包括的に網羅し、すぐれたエディションで現代によみがえらせようとするものです。校訂にはイベリア半島音楽の研究者ロバート・スティヴンソン博士も加わっています。すでに古いロマンセや、ビリャンシーコなど楽しい世俗曲も入っておりますが、スペースの関係もあり、今後はバロック以前の宗教声楽曲、オルガン曲に限って購入していくつもりなのでご了承ください。

今回購入したのはジョアン4世に仕えたレベーロ(1610-1661)の“*Psalmi tum vesperarum, tum completorii, item magnificat, Lamentationes et miserere*”という曲集。この人はジョアン4世の39歳の誕生日のために39声のミサ曲を作曲しています。

それからガスパル・フェルナンデスの“*Obras sacras*”これは宗教曲集という意味で、ミサ「汝はペトロなり」、聖ヨゼフのミサといったミサ曲やモテットが多数収められています。この巻のクリティカル・ノートにはLiturgical functionという項があり、それぞれの曲がどの祝日のミサ、あるいは聖務日課のどのような場面でうたわれるべきか、ということが典礼的な側面から説明されています。

もう1冊は“*Antologia de polifonia Porutuguesa 1490-1680*”です。この時代の宗教曲が収録されています。何人かの作曲家によるアレルヤが入っており、ヴィオラ・ダ・ガンバなどのコンソートで演奏しても美しいだろうと思われます。

(杉本ゆり 記)